

◆掲載順

定義にしたがって選んだ一二文字を、画数の少ない順に並べた。同じ画数の漢字は、大漢和辞典の通し番号順に従って並べた。

◆部首

大漢和辞典の部首に準拠。漢字は表語文字であるため、見ただけでは確かな発音を知ることはできない。そこで、漢和辞典では、漢字を配列するのに一般に部首による方法が行われている。この「部首法」は、後漢の許慎が作った『説文解字』という辞書（紀元一世紀ごろ成立）に始まるとされている。↓付録（巻末③）参照

◆見出し漢字とお手本

見出し漢字とお手本として薄く示した漢字の書体は、本書を印刷する会社が所有する印刷書体（フォント）であり、大漢和辞典のフォントとは異なる。

◆なぞり書きにおける筆順

筆順は書字の中で自然に生まれたもので、「正しい書き方」という唯一のものではなく、本書では示していない。基本的に「上から下」「左から右」の順に書けばよい。

↓付録（巻末①②）参照

◆なぞり書きにおける注意点

お手本漢字のフォントは、横線の終わりに三角形のような部分（ウロコ）があったり、トメハネハライが三角錐のように広がったりすばまつたりしているが、これは文字のデザインによるもので、忠実になぞって書く必要はない。

◆漢字説明の構成要素

【大漢和番号】その漢字の大漢和辞典における通し番号。

【字音】その漢字の音読み。大漢和辞典の記述を抜粋。

【字義】その漢字の意味。大漢和辞典の記述を抜粋して用例は省いた。

【出典】その漢字の出処となる書物の名前。

【Unicode】その漢字の文字コード。

◆字義で使われている言葉

【本字】一般の正字（標準とされる康熙字典体のこと）よりも、さらに字源的に忠実な形（篆文をそのまま楷書にしたような形）をした文字。亡↓亾、留↓畱など。

【古字】異体字（字音も字義も同じだが字

体が異なる文字）のうち、特に古い起源



を持つ文字。古文。禮↓札など。

【俗字】字体は正字ではないが、世間一般に通用している文字。その多くはいわゆる「略字」である。糧↓粮、蠟↓蛻など。

【籀文】書体の一種。周の太史籀の作ったと言われるもので、秦の李斯が作った篆に対して大篆ともいう。秦系とされてきたが、異説がある。

【譌字】誤字。訛字。うそ字。

◆大漢和辞典からの変更点

■他項を参照する漢字に大漢和番号とその字義を補った。『』内が該当する。

■「く」に作る」は「く」と書く」に変更した。

■字音や字義の仮名遣いを現代仮名遣いにした。

■接続詞の漢字表記をひらがな表記にした。

■字義の記述には読みや漢字を補足した。

■「」内が該当する。靈「ユライル」のような漢字の下のカタカナは「ライ」「リュウ」「ル」のように読む。

■熟語の用例・出典は省いた。

参考文献…『新漢語林』（大修館書店、二〇一一）